



日本文学全集 33



石川達三

結婚の生態 僕たちの失敗



河出書房

日本文学全集 33 石川達三



© 1973

責任編集

武者小路実篤 川端康成
石坂洋次郎 山本健吉
瀬沼茂樹

昭和44年9月20日 初版発行
昭和48年5月20日 6版発行

著者 石川達三
発行者 中島隆之
印刷者 和田彰三
装幀 原弘
印刷 東洋印刷株式会社
製本 中央精版印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の六 会社

電話東京(292) 大代表 3711
振替口座 東京10802

落丁本・乱丁本はお取替いたします

定価はカバー・帯にあります

目次

結婚の生態……………五

僕たちの失敗……………三七

年譜……………四七

文学入門……………六二

作家の横顔……………七五

久保田正文……………六二

竹内希衣子……………七五

結婚の生態

結婚について、私は永いあいだ否定的な考えをもっていた。否定の理由というのは私の我儘な感情にすぎなかったかも知れないが、しかもその我儘を自分でどうしても突きぬけることができなかった。要するに若い未経験な私は結婚を自分らしい理屈でかたづけようとしていた。そしてそれらの理屈は結婚生活をはじめてからも時おり私の心に蘇^{よみがえ}って(何のために結婚したのだろうか)と考えるほど心の中に長い尾を曳^ひいていた。

結婚否定の理由としては、妻は多かれ少なかれ生活の邪魔になるのだから活動期の男は避けるべきだとも考えた。男が真剣になって愛するには女はあまりにも愚かであるとも考えた。また一方では孤独がほしかった。孤独は心身を清め新しくするきびしい道場でもあり、清潔な純粋な自己をみがきだす厳肅な仕事場でもある。結婚は孤独からの自殺であるとも考えた。

しかしながらこういう否定の気持もその底をつきつめ

てみれば、良き結婚を夢みながら放浪してただけであったかも知れない。女には絶望したようなことを口にしなから、実は満足し得るような女をみつけるのに疲れていたのかもしれない。けれどもこういう否定や絶望の年月を経ているあいだに青年期に夢みた理想の女性という幻影は次第にとりのぞかれてゆき、現実に見み得る範囲でよき女性を求めるところまで考え方が大人になってきたことは争われない変化であった。しかしこういう変化はさびしいものであった。

「同棲ならしてもいいが結婚はいやだ」

ふてぶてしくも私はそう放言するようになっていた。しかもこういう考えを誇らかに語り、確乎^{かくこ}たる自分の生活態度がここにあると信じていた。結婚は、それが如何に幸福なものであろうともなお生活の歪みを作るものである。吾々は両足に平均に重みを支えて直立した姿勢から、妻の方にむかって傾いた姿勢になってゆくにちがいない。孤独な者のもつ純粋な視界のうえに結婚者に避けがたいフィルターをかけてしまふにちがいない。この濁りが残念なのだ。……私はそう考えていた。

やがて私はある女と同棲して苦渋にみちた七カ月を生活した。それは生活したというよりもむしろ「潜りぬけた」といふべきものであった。愛情のあるべき場所には憎悪が巢食^{くさ}い、絶えざる後悔と屈辱と絶望との泥のよう

なかなか身を沈めて、私はまのあたりに地獄を感じることも屢々であつた。

思うにこの同棲の失敗に帰した最大の理由は、私がこの女に対して愛情を感じ得なかつたことであり、愛情を感じ得なかつたことの理由は、私の心の中にしつこくもなお残つていた理想の結婚への期待であり夢であつた。

この女を妻として一生を送るのではたまらないという考であつた。それは大変に誇りたかい思いがあつた考え方であり女へのこの上もない侮辱でもあつたろうが、自己の責任をはたす上に於てこの同棲を結婚にまで進めなくてはならないと幾度か決心をかためながら、そのたびごとに何としても実行し得なかつたのは、この愛情のうすい結婚に満足し切れないひとすじの悲しい心であつた。

もはや結婚否定の怪しげな理屈は崩れていた。私が本當に結婚を否定し得るならば愛情はなくともこの同棲から結婚にはいり得たにちがいない。同棲はしてもいいが結婚はいやだという真の意味は、未来の良き結婚を期待してその時がくるまでのあいだの方便的な生き方であるにすぎなかつた。私自身そういうひそかな心の期待に気づかないで表面的な否定論をまるで真理のようにふりかざしていたのであつた。その怠慢が結局は同棲の失敗を招き女を傷つけ自分をも傷つける結果をもたらした。

た。

しかしながらひとたび信頼を失つた両性関係というものは伐り倒した杉の木のように再び元の姿に立ち直らせることは全く不可能なものであつた。醜い破綻をきたした後になお残つてゐる女の愛情は一転して悪魔的な憎悪の姿をとり、相手を破滅に導いて自分も共に滅び去ろうとするすさまじさに向うものようであつた。私は身のまわりに地獄を感じた。

こういう重大な失敗が永い年月の生涯からみて、彼女のために良かったか悪かったかは知らない。彼女に賢明さがあるならば尊き^{たがひ}^{たがひ}の石として誤りなき将来を築いて行つたであらう。

そして私にとつては全面的な生活の転回がなされた。

転回というよりはむしろ奥底にひそんでいた自分の本當の心を発見し、それに基いた生活に向つて新しい歩みを踏みだすことができたというべきであらう。怪しげな理屈にたよつた強がりな生活態度から、弱くとも小さくともひたすらに質実な自分の道を歩もうとする謙虚な心に立ち戻ることができた。

もともと、一時的な生活のつもりで二人の者が同棲するということはそれ自身将来の悲劇と不幸とを築くような愚かしいことであつた。両性関係は愛情から出発すべきものであり、誠実な心によつて始めらるべきものであ

った。同棲という生活様式は周囲の事情から已むを得ず
にそうなった場合でさえも多くの危険を孕んでいるが、
当人たちの都合でそういう形式をとっている場合は最初
から彼等のあいだの誠実に於て欠けるところがあると思
わなくてはならない。両性関係は当事者たちに一ぱいな
誠実があるならば必然的に結婚という正式な形をとるべ
きものであつて、(法律的なことはどうでもいい)とい
う自信ありげな言葉には多くの欺瞞がかくされている。
失敗の生活からふたたび元の孤独にかえつたとき、私
ははじめて正しい結婚のふかい意味を考えることができ
た。誰でもがする極めて平凡な古めかしい結婚という形
式は、簡単に考えれば何でもない愚かしい生活であるか
も知れないが、深く反省してみれば複雑な意味をもつた
或る完成した生活の形式で、軽率に改変したり否定した
りするわけにはゆかないものであつた。そうしてまたま
ごころを置めた正直な誠実な結婚がどんなに得難く尊い
ものであるかを知つた。私は以前の思いあがつた一切の
考えをすてて静かな弱々しい言葉で結婚の価値を語り謙
虚な心になつて社会の結婚者たちを眺めるようになった。
以前には仕事のためには生活を犠牲にしてもいいと
まで考えていたが、今度は生活のためには仕事を犠牲に
してもいいと思うほどに變つていた。

うであつた。

世界にはいつてきた喜びを知り、また完成された道徳
の巨大な輝きとその深い意味とを知つた。愚かなる者に
とつて、道徳の見事な価値は、その埒をふみはずしたと
きにはじめて驚異と悔恨とをもつて感知されるもののよ
うであつた。

夏のまっさかりのある朝、私はそれまで住んでいた下
宿屋からアパートに転居して行つた。近くにいる二三の
友人たちが米屋から荷車を借りてきて、私のみすぼらし
い荷物を何度にも運んでくれた。それは今までと同じ六
畳の今までと同じむさくるしい下宿住居であつたが、た
だひとつ有難いことにはドアに錠をおろしさえすれば全
く世間から自分を隔離してしまふことができた。

東の窓の外には朝顔の蔓がのびて今朝の花が凋んだま
ま紅かつた。枇杷の木には芋の蔓が梢までからんで小さ
なむかごが一ぱいについていた。蔓はさらに伸びて雨樋
にまきつき私の窓にまで青い三角な葉を茂らせていた。
北の窓の外には天理教会のひろい庭が見下されてダリヤ
と向日葵とが日ざかりにかつと咲いていた。たしかにこ
こには清潔な孤独が十分にあるようであつた。

身のまわりにはますます不便が多くなつてしまつた。
私は自分で朝の牛乳を沸かし、雑巾を用意し箒を買わな
ければならなかつた。しかし、何人にも手を触れさせな

いこの審あきらのような秘密な場所をもつことのできたのを祝福した。

私はまっしろい麻の服を着て街を歩き、夜は開けはなつた窓から射す星の光を浴びて眠った。雷鳴がとどろきすさまじい雨が大地を唸うならせた夜、私は窓に肘をついて稲妻を眺めながら楽しい心で口笛を吹いていた。随分さびしい生活というべきかも知れない。けれどもこの寂しい生活からはじめて、全くの出発点にもどつたつもりで、これからは良い生涯を築いて行こうと思うのであった。私はひっそりとした夏の夜の机にもたれてこういう考えに幾たびか涙を流した。

このとき私の心に於ける重大な変化は、良い生活とはすなわち良き結婚生活を意味するようになっていたことである。二十四五歳のころから以後ずっと続いていた結婚否定の皮相な考えが崩壊したあとには、不思議にも青春時代にもつていたような良き結婚への夢に似た憧れが甦よみがえってきたのであった。しかしながら当然そこには七八年の年齢の垢がさびしく感情の表面を掩おほうていて、そういう夢を現実期待する若さはもてなかった。

「女の尊さは感情の美しさだ。感情の美しい女ならばその他にいろいろな欠点があつても最後まで愛して行けると思う」

大方の夢をなくしたのちに私が女に期待する要素はた

だこの一点にまで締められていた。これはたしかに現実の世間に採とまれた後の言葉であつた。そしてこの言葉の中には謙虚な心もあり誠実な心もあつた。私はこの考えに満足し、またこの一点に執着した。感情の美しさを女に求める気持はまた自分でも美しい心を与えようとする考えでもあつた。そうして心から真実を傾けて抱きあう者を求めていたのだ。それだけ深く私はいためつけられていたのである。

このようにして私は改めて清らかな結婚を望みながら孤独なアパートでひと夏をすごした。不思議なことには私はその良き結婚の時期を来年の春にしようと思つてゐた。格別心に期待する女を知つてゐたわけではない。そういう奇妙な予定をたてていることは自分でも辱はかしい気持であつた。しかし何かしらこの愚かな感情を叩きこわしてしまいたくなかつた。この愚かさを苛やめないで自ら許してやりたく思い許されることが楽しかつた。私はひどく感情的になつてゐたようであつた。そして新しい青春が私の上に甦よみがえってくることをしきりに期待してゐた。私は太陽を望んで伸びてゆく草々のように潑刺はげしくと明るい気持になりつつあつた。

2

それから二カ月ばかりたつてようやく秋めいた涼しさ

がやってきた頃のある夜、私ははじめて其志子^{きしこ}に會つた。ちょうど友人に誘われて街に遊びに出た歸りで二人とも少し酒を飲んでゐた。この江藤という詩人は前からの知りあいであつたらしく気軽に其志子とその姉とを私に紹介してくれた。

その夜、私はしきりに雄弁であつた。元來若い女との座談はできない方であつたから話の相手は江藤であつた。どういふ話の工合からか私はしきりに自分の期待している良き生活について夢のような話をしてゐた。

先ず海岸松林つきというような安い土地を千坪ばかり買つて草ぼうぼうにしておく。道路からみると夏は家がどこにあるか分らないほどに茂るだろう。家は鉄筋コンクリートで二階六疊に、下六疊、屋上はバルコニーにする。階段を家の中につけると家が狭くなるから壁の外に階段をつける。雨の日には傘をさして二階に上る。これは不便かもしれない。二階は書斎兼寢室で下は居間である。ここにたったひとりで仙人のように静かに住む。もし金が豊かにあるならば立派な家を建てる。広間には薪を投げこむストーヴがあり、二階へ上る階段は広間の中を曲つて上る。書斎には本をびっしりと置きならべて疲れたときに眠る手輕なベッドを窓際につくる。家から一段下つたところには是非ともテニスコートをこしらえて、午後の静かな日光の中に白いユニフォームを着た妻

と白い球を打ちあう。子供たちが育つてきたならば私は半白のにやかな父になつて若々しい娘や息子たちを相手にテニスをやる。この位のことではできていいとは思われないか。良い生活をするとは何よりも大事なことだぞ。そして一年に一つずつ立派な長編小説を書くのだ。

こういう他愛のないことを考えてゐる自分をさらけだして話すことは少なからず恥かしい氣持ではあつた。以前の強がりな私ならば決して話しはしなかつたであらう。その時分の私は不思議に素直な氣持になつており、またそうなりたいたと望んでゐた。こういう弱さを他人の目からおしくすことは、やがて自分の目をもくらしめて反省の力を失わしめることにもなる。それが私には怕^{こは}かつた。以前の私は他人の前に強さを装ふことのみをつとめているあいだに、自分自身に対しても強さを装ふようになり、結局は自分の正しい心の姿をも見失つていたのであつた。

こういう私の夢物語を江藤は大して興味もなさそうに聞いていたが、テンプルの向うにいた其志子はしきりに私の夢に賛成してくれた。広間の高い天井の下を曲つて上る階段の設計は殊^{こと}に彼女をよろこばせ、また妻とテニスをする生活は彼女の空想をたのしませたようであつた。

彼女は花模様のついた軽いワンピースを着て白い細い

腕を出していた。それは大変に白いなめらかな艶のいい腕であった。からだは一体に小柄で細く華奢であつたがひと目見て処女の純潔さをはつきりと感じられるほど若く快活であつた。短く切つた赤い髪の手は首筋のあたりでカールされ、広い額と大きな茶色の目とをもつていた。そして暗い影のないのびやかな性質のようにみえた。江藤は彼女がロシヤ文学を研究しているのだといつたが、其志子はそれを極力否定した。研究というのは江藤の誇張で本当は彼女がしきりに小説を読みあさつていて、ツルゲーネフ、ドストイエフスキイ、アルツイバアセフ、トルストイなども愛読したという程度のものであつた。

小説を読む女。——このことは私にとって大きな意味をもつていた。私が其志子に向つてはつきりと注意してその性格をみようとしはじめたのは、あるいは江藤が戯れにいつたそのひとことからであつたかも知れない。

高い程度の文学を愛読する人は一応信じてよいと私は考へている。良い小説というものは不思議に人間の魂を静めまた清めるものであり、そういう小説を愛読する人は清らかな性情をもちまたはそれを希望する人であると思はれる。なおいふならば真に芸術を理解する者に悪人はいないと断言してもいいと思う。私は自分が文学を業とするものであることを喜ばしく思う。それは自分が

たゆまずに清く美しい性情をみがいて行かなければならないし、またそれを望んでいるからでもある。そして其志子が良い小説を愛読しているということは私にとつてはひとまず望ましき女性であるということでもあつた。あるいは私の希望する唯一の条件であるところの（感情の美しい女）というのは、良い小説を愛する女とかなり共通なものであつたかも知れない。

事実、この夜の短い座談のあいだにも私はいくたびか彼女の感情の美しさを感じた。若々しさにみちた我儘なそしていたづらっぽい幾つかの言葉を私は記憶した。それは単に若い故に私に美しく響いた言葉であつて、年齢を加えるに従つて失われて行くものであるかも知れない。私はそれを判別しなくてはならなかつた。江藤の話によると彼女とその姉の模子とは両親を失つて二人きりで住んでゐるということであつた。そういう恵まれぬ境遇にあるにしては其志子はのびやかな我儘な性格をもつていた。私は楽しいがしかしすこしく真面目な考へにふけりながら彼等と別れてひとりきりのアパートへ歸つた。其志子は最後に、ちかい中に私の著書を借りに訪ねて行きたいといつた。私はその日を楽しみにしてゐた。

良い生活とは秩序ある生活でなくてはならない。私はそのために自分の日常の習慣さえも変更しようと思つた。

め、そうして目算の立たない来年の春の結婚のために備えていた。まず早起きの稽古だ。遅くとも七時には起きること、そして午前中に一日の予定の仕事を終えること。遅くも午後の二時か三時にはすっかり予定を終えなくてはならない。幸にも東の窓から射す朝日が暑くて遅くまで寝てはいらなかったので私はこの計画を実行することができた。こういう規則的な習慣ができたならば午後のテニスもやれるだろうし、夜は静かな読書や意味ふかい話題をたのしむこともできるであろう。またそうすることによって作家にありがちな不健康から逃れることができるであろう。

この夏のあいだ私は裸になって仕事をした。流れる汗をふきながらの仕事はかえって爽快な気持であつた。日盛りにはトタン張りの庇が焼けてしまうので、ときおり庇の上に水を撒いたりした。仕事は気持よく進み、夜になるとゆったりとした散歩や読書をたのしんでから明日を期待する若い気持になつて眠るのであつた。

けれども期待していた其志子は訪ねてはこなかった。私がこういう若い娘のことを心にかけてたり何日も記憶していたりすることは珍しかった。詩人の江藤はいつでも若い娘たちと面白そうに遊びまわつて、その小遣のため洋服を質屋に入れたりしていたが、私にはその気持がどうも理解し兼ねた。私にとつて若い娘たちとのつきあ

いは莫迦^{ばか}莫迦^{ばか}しき以外の何でもなかった。その潑刺とした話や身ぶりは見事ではあるが、こちらから彼女等の子供っぽい気持に話を合わせて行くのは大変な努力であつた。従つてそういう友達はひとりもなかった。これは私の性格にゆとりがないためかも知れない。娘たちとのつきあひにも真剣な気持でぶつかると、自分の方が退屈し疲れてしまうのもあるらしい。

しかし私はなぜか其志子の来訪を期待していた。そしてその次に会つたときに、

「本をとりになかつたね」と私はいった。

「ほんとうに行つてもいいの？」

「いいさ」

「では明日行くわ」と其志子はやや投げやりな調子でいった。

彼女は夕方になつて私の奮めいた室のドアを三つ叩いた。彼女は軽い洋服を着て下駄をはき、長い白い脛を出していた。大変気軽に家を出てきたという風であつた。

さて、何を話すべきであろうか。私はいつもの通り机に向つてぎこちなく坐り、其志子はその向う側に坐つて汗をかいていた。私は仕方なしにちやうど書きかけていた作品の中の十枚ばかりを読んで聞かせた。

「さ、本を頂戴、帰るから」と彼女はいら立たしそうにいった。二人だけである室の緊張した空気が彼女を息苦

しくしたのである。なぜこういう場合に私たちは息苦しいほど緊張しなくてはならないのか。それはより深い關係を生ずる危険を警戒しているからに違いない。してみれば緊張を感じるということはまた逆に、自分自身がより深い關係への誘惑を感じているということでもあるに違いない。

彼女は本をうけとるとすぐには立たないで、読むでもなしに頁をめくりながら大變に面白い言葉を放った。

「わたしね、度々遊びにきたいと思つていたのよ。だけど、よすわ」

「ほう、なぜ？」

「でもね、あなたが惚れそうだから」

私は少なからずこの率直な言葉にまごついてしまった。いかにもその危険は感じられる。そういう氣持の出鼻をびたりと押えた言葉は思わず私を笑わせた。

「惚れられると困るかね」私は比較にならないほどに愚かしい氣の利かない返事をした。

「いやよ！……だから、惚れないんだったら遊びに来るわ。惚れないっていいなさい」

これは命令であり、誓いの要求である。そして私は再び愚かしい応答をしてしまった。

「僕にそんなことをいって君はどうなんだ」

「私は大丈夫よ。だから、ね、惚れないっていいなさ

い、早く！」

なぜ彼女はそのようにいら立たしく要求しなくてはならなかったろうか。私は苦笑しながらこの横暴な要求を承諾した。すると其志子はひらりと立ち上り白いむき出しの脛で跳るように室を横切つて、左様ならともいわずにこの男臭い窖をとびだして歸つてしまった。それは何か非常に鋭敏な処女の感覺をもつて、次に起つてくるであろう危険を予感してそれから逃げ去つたという風であつた。

消えて行く登音を聞きながら私はやはり机に坐つていた。そして殆んど三十分も坐つたまま今日の短い対談について考えていた。目を瞠るような愕きと喜びに私は溜息をついた。私の判断をもつてすれば、彼女は敏感な伶俐なそれから我儘な娘であつた。そして何にも増して珍重すべきものはその單純な率直な感情であつた。そういう率直さを尊く思つたのは、私が自ら率直に素直になりたいと望んでいたからであつたかも知れない。しかしあの奇妙な提案はたしかに私の虚をつき急所を打つていたようだ。そして私の判断に誤りなければ、彼女自身が傾いて行く自分の心の危うさを自覺していたのである。私はかすかな希望をもつて、来年の春の候補者として其志子を分析しはじめた。

ずっと後になつて彼女はこの日の事を私に告白した。

その言葉によると其志子はこの日私のアパートの階段下まできたとき、急にはッとなって立ち止ったのである。

はつきりと或る予感があった。——（もしもいまこの階段を登ってしまえば、一身上に何か大きな結果をもたらすようになる、きつとなる——彼女は逡巡し、ひとりで動悸をたかぶらせた。それから、「思い切って上っちゃったのよ。そしたら、やっぱりそうだった。私の予感はとても当るの」というのであった。してみれば其志子がこの日私に恋愛をしない誓いをさせたのは、彼女自身の感情の傾きを私の誓約によって支えようと望んだものであった。それは彼女がまだ結婚はしたくないと思っていたわけでも何でもなく、ただ一片の羞恥として生活上の大きな変化による恐怖をもっとさきに延ばそうとする本能的な姿勢にすぎなかったのである。

私は結婚について考えはじめた。私たちはまだ五回と会ってはいなかったし、たくさん話をしたこともなかったから、私は其志子については何も知らなかったといつてもいい。しかも私は何もかも知っているような気もしていた。直感を信ずることができれば私はあらゆる直感の力を動員して彼女を感じしてしまっていたのかも知れない。あるいはまた先走りがちな感情の想像力が自分勝手な其志子を私の心の中に描き得ていたのかもし

れない。

私は自分一個の判断をもって、結婚したならばきつとうまく行くだろうと考えることができた。というのは生涯はじめな愛情をもって家庭を営んで行けると思つたのである。こういう場合の理性的な冷静な判断はあてにならないことが多い。感情が理性的の仮面をかぶつて判断力を独占してしまうのだ。私は極力それを警戒しながら自分の考えをきめて行つたけれども、良い結婚をしようと思ひ氣持があるだけでも、もはや純粹な理性は失われているのだ。

しかしながら私は其志子に対して恋愛を感じていたかどうか解らない。恋愛という感情は一個の人間としての異性を求める心であるが、私はあまりにも多く家庭と家庭生活とのことを考え耽つていた。良い生活をしたということが私の第一の願望であつてそのための条件としての良き妻を求めていたようにみえる。農夫が多くの収穫を求めることと良き土地を求めて耕作することはいずれが主であり従であるだろうか。土地なくして収穫はないと考えるならば、土地こそは彼の第一条件である。良き妻なくして良き生活がないものならば妻は第一条件であらう。しかしこの問題は各人の考え方によるかもしれない。そして私の其志子に対する感情はすべて良き家庭のためにという考えに要約されていた。それは必然的

に其志子自身の幸福を築くことでもあると信じていた。

ある午後、其志子は初秋の涼しさに軽い洋服を脱いで和服になって訪ねてきた。彼女は私の室に入るとすぐに東と北との窓をすっかり開けてしまふのが癖であった。この日もいづらか乱暴に窓を開け放つて東側の道路のみえる高窓の傍に坐った。そうすることはこの室に罩^{つつ}っている息苦しい男臭さを嫌つたためであつたらうか、それとも閉め切つた室の中に不安な緊張を感じすぎたのであらうか。

私は灰皿と煙草とをもつてその窓に行き壁に背をもたせかけて私の希望を話しはじめた。私の決心は一応きまつていた。永いあいだの不安定な生活から離れて永い計画をもつた家庭の生活に入る覚悟はできていた。私はしみじみと希望に潤^{うる}つた心になつて静かな口調でいった。

「僕は結婚したいと思つてゐるんだ。いままでは随分とりとめのない暮らし方をしてきたが、もう家庭をもつていい頃だ。僕の収入は不定だから月給とりのようには行かないが、暮しに困るようなことはないつもりだし、とても良い家庭を造りたいと思つてゐるんだ。いい加減な結婚ならしたくはない。結婚するからには誠実な気持ちで、一生の計画をもつてほしい。そのためには僕の仕事を犠牲にしてもいいと思うくらいだ。芸術上の仕事とい

うけれども、僕はちかごろになつてそう思うのだが、立派な家庭を造つて生涯変らずにそれを守つて行けて、ほんとうに幸福な生活をする事ができれば、これこそ芸術だよ。身を以て体現した芸術だよ。それがやりたいんだ。僕の夢かもしれない。僕はもう二度も三度も女性に絶望したり結婚を否定したりしてきた。いまさら結婚しようとするからにはいい加減なものなら意味ない。僕はいま自分でも愕くほど奇麗な誠実な気持ちでこういうことを考へてゐるんだが、君ならば僕の夢を実現させてくれそうな気がするんだ。勿論いろいろな困難はあるだろうが、しまいまで誠実な気持ちを失わないで努力をつづけて行けそうな気がするんだよ。君はどう思う？」

其志子は身動きもしないでじつとしまいまで聞いていたが何ともいわなかつた。答えないのは拒否の意志表示であらうか。私はまた新しい煙草に火をつけて静かに返事をまつていた。遂に彼女は答へた。

「わたし、そんな立派な女じゃないわ」

女たちは昔からこういう拒否の方法を知つていた。それは常に多少嘲弄のまたは輕蔑の表情をもつて語られてきた。あなたのようなお立派な方にはもっと立派な女が居ますわ、と。けれども其志子はその同じ言葉を少しく悲しげな調子でいつた。私の夢はあまりにも美しく彼女には困難すぎるように思われたに違いない。そうだ、